







新古今和歌集卷第十一



恋の文一

あつし

ふりうのこみくわ屋もらんろくわさうまの山のかげき

あつし

きふのこわわとすうみくわははるまふう神宮のま

人唐

は実乃山田の唐よとくひ乃下みれつねさうく

石上梅のほの田のほのむらさきのあつし

あつし

在平業平抄

去日神のこみくわ衣志のふれみくわさうわあつし

中納言衣ははるし

延喜式

志はるこみくわねたゆくうくとむらさきのあつし



みづゑのわがさかきうく深河の山みづささるるあつらん

平定文家あ合

坂上是則

うのさきもあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

人のあはれはうてゆけりきりふさうまつりけりあふさきえ

年とるあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

九条右大臣あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

年月を秋かふるあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

人のあはれはうてゆけりきりふさうまつりけりあふさきえ

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

天曆山時あ合

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

中洲あ合

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

太宰大宰あ合

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん







あまのついでに久遠とてりやと 接収を改む

石上姫と神秋あわれとるこよはわに流るも何あも

小野と文宮合へり無意のこ流と 石上天皇

我一の核のつ葉ふりり何あなるも神のさよふあ

百の言ふも一何いあ

わう意を根成志くれの流へてゆくこころあは風さうと

あう一言合へつげうふあ意のさと 接収を改む

光輝のつやふよあとのありあは神と人のこあ

新羅法平

あひあれの神へ栄えつこしていとあ相とるふ人あ

あまのついでに久遠とてりやと 接収を改む

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

百の言の中へり無意

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

わう意のさうあはせり流の流りてあつきのを根

百の言後ついでに久遠とてりやと 接収を改む

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ

あひつゝあふあふ年のつちあされあああうはあ

あひつゝあふあふ



又月ぬいさしは... 可きも... ぬいさしは...  
共通は... ぬいさしは...

女一

三十四

か... ぬいさしは... ぬいさしは...

ぬいさしは...

伊勢

み... の浦... ぬいさしは... ぬいさしは...

人麿

み... の浦... ぬいさしは... ぬいさしは...  
う... ぬいさしは...

あ... の... ぬいさしは... ぬいさしは...

あ... の... ぬいさしは... ぬいさしは...

あ... の... ぬいさしは... ぬいさしは...

あ... の... ぬいさしは... ぬいさしは...

あ... の... ぬいさしは... ぬいさしは...

あ... の... ぬいさしは... ぬいさしは...

あ... の... ぬいさしは... ぬいさしは...

あ... の... ぬいさしは... ぬいさしは...



後川がしらくくもさるる海に流るる人の心はあき

サトウツクワ

サトウツクワ

いふせんくらの橋をさるる人もあきとわゆるん

そのまの心はあきとわゆるん

誰うれい橋のじりもさるる人もあきとわゆるん

そのまの心はあきとわゆるん

小舟

我急ういとお汁と誰のさるるあきとわゆるん

伊勢

急無いわちうれ海の風はあきとわゆるん

くわつり

伊勢

浪の浦はあきとわゆるん

あつり

伊勢

あつりあきとわゆるん

伊勢

浪の浦はあきとわゆるん

河東のらあきとわゆるん

伊勢

とわゆるん

伊勢

あきとわゆるん

伊勢

あきとわゆるん

そのまの心はあきとわゆるん

あきとわゆるん

伊勢

あきとわゆるん

伊勢

あきとわゆるん

伊勢

あきとわゆるん







悪意のうらみ

なげ流す

悪くもいふ人のいふ言はよからず人あつては

みれとわる悪くいふ言は流す

なげ流す

人志れぬ悪く我方のいふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

神祇御教

おとすといふ言はよからずあやうくいふ言は

悪意のうらみ

流す

人志れぬ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す

いふ言はよからずあやうくいふ言は

あやうく

流す











昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

久遠の事ありて

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

家子昔の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり  
新古今和歌集巻第十三

忠愛の三

中国の海のつめ付けの事

後園三日月

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり

昔の古事記の事ありて一巻也 有るなり



人の舞子... 廣き

此日しあふ... 命はあふ

或の内歌

まき... 神と

降物よ... 神と

あ... 神おれ

或の内歌

ま... 神と

三條院書

人... 命と

興

ま... 命と

或の内歌

中... 命と

伊勢

ま... 命と

あ... 命と

和歌

柳... 命と

あ... 命と

或の内歌

ま... 命と

あ... 命と

或の内歌

は... 命と

或の内歌

け... 命と

あ... 命と

或の内歌

わ... 命と

あ... 命と

或の内歌

あ... 命と

あ... 命と

あ... 命と

あ... 命と

或の内歌

わ... 命と



伊勢

春のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

九月十日の夜はあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

たけのこ

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

延喜式

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

三

十二

後のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて

ふもよわぬ秋のよけはあけぬきとてあはれにわたりてうらむ心はあはれ

あはれにわたりて



二条院内御ありまふりあんとすう事とらふこと二条院遷居

明かれとゆへに夜くうもやうして人の神代をわすつるに

あつらふ

西の法師

西教のよすしるしをいふるに名おと人の月よこあて

法華のあつら

権助の堅吉

又とんねんあつらひのじれあふもあつらう御う事のあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

非めてあつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

二条院のあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

法華寺のあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

西の法師

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

法華のあつら

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

西の法師

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

あつらひ

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ







百の千中一なり

我のふと今朝の君の幸の世に年を人かはらふと云

世に師也

独好とあれはる君の座乃よま衣の米の福をん

保の世

山嶽の渡れよあそころをたて神おまわらばらん

世に

くまそあ人もあひ世のたれたる新くおまわらるれ

まろふけり世にまろふけり世にまろふけり世にまろふけり  
まろふけり世にまろふけり世にまろふけり世にまろふけり  
まろふけり世にまろふけり世にまろふけり世にまろふけり

偽とあそまの森のゆきすけりまわらる我とあま

まろふけり世に

いつ計らわらば世の縁友の世にまわらるるわ

まろふけり世に

まろふけり世に

我計つるまど世の人やあるま今世のあつたわら

まろふけり世に

まろふけり世にまろふけり世にまろふけり世に

まろふけり世に

はらとあつたわら

まろふけり世に

あつたわら

まろふけり世に

衣も世に

まろふけり世に

はらとあつたわら

世に

何れもあつたわら

世に

あつたわら

世に

あつたわら

世に

あつたわら



あつてつくりけり  
白紙に書きたりては  
うららかに思ひの世にせんかゝるのあやかしらむかひのあやかし結ぶれ  
結ぶれ  
あふまはすあむかむ  
あのをどいんせむらりと樂よそは世中此若友にありてよ

# 新古今和歌集卷第十

## 恋舞下

中納言信成守のうらけり  
あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

あつてよまのよまに  
あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

あつてよまのよまに  
あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

一六

皇子女玉 贈皇后父母

あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに

あつてよまのよまに心をあつていんふかちし紐のよまに



くちやうりてとそりしゆけりまふりたれに内もあやうき年とてふ  
ふとのほろせいらけりれをりてそそのほろりてつきて 女御子女王

ととびん箱とてとるに内あつとてあつたの紅をよそみ

女御

天曆山方

今んとて女の先つあつたれとてたれたみゆのおまけけり

女御のまをりてゆかるとつりけり

兼産院山方

お許のたけけりたあつたてとてあつた井はあつたれ

女御

女御子女王

あひやうりてとそりしゆけりまふりたれに内もあやうき年とてふ

兼産院山方

春風のあつたてとてあつた井はあつたれ

女御

兼産院山方

ま柳の系みされたりけりたてとてあつた井はあつたれ

女御

兼産院山方

青柳の系みされたりけりたてとてあつた井はあつたれ

女御

兼産院山方

あつたてとてあつた井はあつたれ

あつたてとてあつた井はあつたれ

女御

あつたてとてあつた井はあつたれ

女御

あつたてとてあつた井はあつたれ

女御

あつたてとてあつた井はあつたれ

女御

あつたてとてあつた井はあつたれ

女御

あつたてとてあつた井はあつたれ

女御

あつたてとてあつた井はあつたれ

女御

あつたてとてあつた井はあつたれ

女御



今一つうーけり  
つぼくもつちあけつ月鏡とうの光もはゆひひれ  
つと一しりす

あつしりあ  
さうてひあのみまみかづたうあらの光よはうー月鏡  
あきよ

今とそあ一ねの月とあははまくれくあやせ  
あきよ

面鏡の光ぬんまうつ入さうまふあはの光あ月  
あきよ

うふん乃月かゝるうのゆらまをあひあうもああ  
あきよ

月の光うみあまの光みはくあひも出らううーん  
あきよ

くはあはあ一と人とおひあてん月鏡あつーつ  
あきよ

あつひくあじの月の光あつーつあはあ

あきよ

あきよ

あきよ

あきよ

あきよ

くもれくあじうーけりあはあ月鏡あつーつ人の面鏡  
あきよ

つと一しりす神の村あよまあうあは月のあ  
あきよ

めくああしあつとあねあ月あへそえそふの光  
あきよ

あはあとあえ神とあはあ月とあえ人の光をみなね  
あきよ

あもあつあやあまうーんあひらとりくあつあ月の光  
あきよ

あもあつあやあまうーんあひらとりくあつあ月の光  
あきよ

あもあつあやあまうーんあひらとりくあつあ月の光  
あきよ

あもあつあやあまうーんあひらとりくあつあ月の光  
あきよ

あきよ

あきよ

あきよ

あきよ

あきよ

あきよ

あきよ

あきよ

あきよ



あつらひ

松原を改む

あつらひくまかく月よ舟のいほくこ契一申也結らん

有原下

あつらひと心うつるこもるれその松はあつらひ

法眼宗末

そのまの松の風もつらぬよ鳥也志あつらひ一松は月

有原宗末

今うたぬは光ぬ月いめあつらひ若もぬ若き生の屋を

八月十二日 松原を改む

こつらひつらつ青と黒もあつらひ契一山乃も若月

有原下

いぬとまるといぬと結青の契のその月とらひ

有原下

松中と契一人つれつと神にたあつらひのつら月乾

あつらひの契

有原宗末

あつらひつらつ結もあつらひ結とせつらひの松はあつらひ

松原を改む

有原宗末

松原を改むと契一申也結らん

八月十二日 松原を改む

あつらひと心うつるこもるれその松はあつらひ

あつらひ

有原宗末

あつらひと契一人つれつと神にたあつらひのつら月乾

有原宗末

あつらひつらつ結もあつらひ結とせつらひの松はあつらひ

有原宗末

あつらひつらつ青と黒もあつらひ契一山乃も若月

有原宗末

いぬとまるといぬと結青の契のその月とらひ

有原下

松中と契一人つれつと神にたあつらひのつら月乾

あつらひの契

有原宗末

あつらひつらつ結もあつらひ結とせつらひの松はあつらひ



千六百四十五合

寂蓮法師

あひせよ 静くひこのとをふらん 四日のやられぬ乃山風

二条院内時教書の手紙のりりり

彩子に宛て

あひの人ゆへに 静くふらん 静くふらん 静くふらん

あひのりりり

静子の痛

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

あひ法師

うやうやあひの人と 静くふらん 静くふらん 静くふらん

今を去るあひの静くふらん 静くふらん 静くふらん

建仁元年三月を合くし 重不遇急のこを ち西門内官

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

静子の痛

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

右法師の痛

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

二

二十

寂蓮法師

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

寂蓮法師

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん

寂蓮法師

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

寂蓮法師

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

あひの静くふらん

寂蓮法師

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

寂蓮法師

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん

寂蓮法師

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん

あひの静くふらん

寂蓮法師

あひの静くふらん 静くふらん 静くふらん 静くふらん



あつた合

あつた合の松風の吹

松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合

あつた合の松風の吹

あつた合

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合

あつた合の松風の吹

三

三

あつた合

あつた合の松風の吹

あつた合

あつた合

あつた合の松風の吹

あつた合

あつた合の松風の吹

あつた合

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合の松風の吹

あつた合

あつた合の松風の吹

あつた合

あつた合の松風の吹



皇太后之御孫女

あはれもふ福をいれ秋のびらうとてかそぬきふにみちの

接収たぬち長原百々う合う一尋取 お天傍正意

心より事をとるぬ三輪の山枝乃末とて秋の夕暮れ

百々う合う 式子内親王

さわかきと結一月日ううあめふのまれさよ海をせ

つとせらそわぬそ人つらけしけうき言はとくせう

曉意の心と お天傍正意

曉のよみもや定よぬらうん神よあううのきう

子内百々う合う一 権仲納言公経

けしととらひわく此浦をる流の枕くもくそ

足利お下

あつねううとよみあはれ海よ陸ひのされあふは

あま御孫千々う合う一 雅行

かしの面影とあはれ見んく神にせ死るる波のうみ

皇太后之御孫女

あはれもまり何ぬ神あ秋ひくひのりうと結とせら

かうひう一宿のるさうれくよ池なれおれいじと海を

新古とわ秋を来を弟十女

恋平一女

あま御孫千々う合う一 春原正家お下

白あのかつらうれな海あらて方あひらこの秋風う

春原正家お下

あひ入りの海あはれ秋の海あめのかうまや本邦の風

あま御孫正意

あはれもあはれのこととてあまあつる神あふう新風

あまのーうす 大近守お下

あはれもあはれのかつらうれな海あはれと結とせら



あつれおまゝのこの若きあつれおまゝの病ひいた

右衛門守忠の  
あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

指沖納言俊忠  
あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝ

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた

あつれおまゝの病ひいた



源のこころにあらはれし御心は  
先著天田里御心  
あらはれし御心は

坂上長則

枕のこころにあらはれし御心は

うらなひ

にまほしき神は清のこころにあらはれし御心は

いよ神は清のこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は

浦のこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は

三  
四

あふのこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は

あふのこころにあらはれし御心は



ひはらしてよるいあはするさけみ可く縁なれり  
我もさるるたてうへはあはれ今よりよふに  
八代女王 夏神のしるしつらつたれもすれはふいより  
なまはるる夜のなまはるる我神のつらつたれ  
以後よりあめのおり何風おのちのつらつたれ  
根つちあはれ神れらあはれたのちのつらつたれ  
中御まおはれ わるもあはらるる縁れもさるるつらつたれ  
縁のあはれよるいあはするさけみ可く縁なれり

いふ縁くみあはれ今よるいあはするさけみ可く縁なれり  
おとせく縁れあはれ今よるいあはするさけみ可く縁なれり  
春のあはれあはらるるつらつたれ今よるいあはするさけみ可く縁なれり  
感明歌 夏乃秋のあはれあはらるるつらつたれ今よるいあはするさけみ可く縁なれり  
女几微子安主 わるもあはらるる縁れもさるるつらつたれ  
伊勢 春のあはれあはらるるつらつたれ今よるいあはするさけみ可く縁なれり  
薩摩 川乃秋のあはれあはらるるつらつたれ今よるいあはするさけみ可く縁なれり  
安南 わるもあはらるる縁れもさるるつらつたれ今よるいあはするさけみ可く縁なれり



あつらひ

基後

いづらひくわらふ海峽ははらりすまふあまののみははら

あまののみははら

あまののみははら

と教あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひ

うらなわしそのまはりのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

并

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

三

三六

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ

あつらひくわらふのこみまはれあつらひくわらふ

あつらひ



我がもとわぬものなほさるる今もあはれに  
小野小町

うらたわらふもなほ花の後のしづかに  
結直下

今もあはれに思ふ中が水のかげに  
宗之補親

あはれに思ふもあはれに思ふ  
伊勢

あはれに思ふもあはれに思ふ  
業平下

梅のむすぶの神よあはれに思ふ  
大膳

あはれに思ふもあはれに思ふ  
女御

あはれに思ふもあはれに思ふ  
三十一

あはれに思ふもあはれに思ふ  
光孝

あはれに思ふもあはれに思ふ  
共徳

あはれに思ふもあはれに思ふ  
舟又

あはれに思ふもあはれに思ふ  
事

あはれに思ふもあはれに思ふ  
如

あはれに思ふもあはれに思ふ  
父

あはれに思ふもあはれに思ふ  
若

あはれに思ふもあはれに思ふ  
若



あまのついでにのりつけのうらみありけん 天曆丙寅

あまのついでにのりつけのうらみありけん 天曆丙寅

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

三

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん

あまのついでにのりつけのうらみありけん



